

## 発 表 要 旨

題目： ロボット工学研究に現れる哲学の問題

氏名： 中山 康雄

所属： 大阪大学大学院人間科学研究科

大阪大学GCOE プログラム「認知脳理解に基づく未来工学創成」(拠点リーダー：石黒浩教授)は、2009年10月に開始された。このプログラムに科学哲学分野の研究が関わっているのは、このプログラムにおけるロボット工学が人間探求を中心的課題としているからである。このプログラムの目的は、次のことにある：「本拠点では、人間理解の研究を展開しながら、人間が適応しやすい、人間に優しい機械システムを実現するためのロボット研究と認知科学が融合した教育・研究を展開する。そしてこれらに、脳研究が加わることで、認知科学研究が扱う高次脳機能をより精緻に探求できると共に、ロボット研究においても、脳科学・認知科学的知見に基づく、より人間に適応したシステムを実現でき、現代社会における問題を解決する未来の工学システムの設計指針を具体的な形で提案できる。」

(<http://www.gcoe-cnr.osaka-u.ac.jp/>)

本発表では、このプログラムが開始されて以来、私が行ってきた研究を紹介するとともに、哲学者が科学・技術の研究活動の現場に接する意義について考察したい。私が本プログラムにおいて探究しているのは、「知覚系と運動系の相互作用的発達」、「人間存在と存在感」、「自己構成と情報処理」、「現実と虚構の構成」、「複数文脈における発話解釈」、「内的時空構成」、「意識」、「規範体系」、「ゲーム体系」、「共同行為」、「社会組織の構成」、「人工物の存在論」、「社会設計論」、「研究方法論（構成的アプローチと分析的アプローチ）」などの問題である。私自身のテーマではないが、「脳科学倫理」や「工学倫理」などもこの文脈で探究されるべき問題である。実際、近年のロボット工学や神経科学は、これら哲学的問題に関する新しいデータを提供しており、哲学者はこれらデータを真剣に受け止め、それらデータを取り込みながら自らの思考枠組みを再編成する必要があるだろう。